

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00029

研究課題名(和文) 欠如的アプローチを超える身体理論の研究：現代フランス現象学運動を中心として

研究課題名(英文) Research on the conception of body beyond the shortage approach

研究代表者

澤田 哲生 (Sawada, Tetsuo)

東北大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：60710168

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：「欠如的アプローチを超える身体理論の研究」という研究課題の下、本事業は、フランスの現象学者たち(とりわけ、モーリス・メルロ＝ポンティとマルク・リシール)が各著作(『見えるものと見えないもの』、『現象学的研究』等々)で提示する身体概念を、彼らが参照する発達心理学および精神病理学の資料を素材として研究した。

こうした方法の下、最終的に、「自己愛(ナルシズム)」という現象が主要な考察対象となった。そしてその考察結果として、この現象が成人期の病的な現象を表しているだけでなく、健常と非健常にまたがる身体経験の基礎的な構造を構成していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メルロ＝ポンティに関して、『ソルボンヌ講義』と『見えるものと見えないもの』を主要なテキストとして、幼年期の人間の身体構造を考察した。リシールに関しては、彼の病的現象へのアプローチとそこで展開される身体論を検討した。その結果として、未熟ないし非健常にしか見えない、子どもや患者の身体、およびそこで形成される身体行動、さらにはその構造が、健常な大人の人間の生活にも潜在的に關与していることが明らかとなった。いくつかの著書や論文に提示されたこの成果は、一般的な意味での健常と非健常、未熟と成熟などの判断基準に再考を促すことになった。この点に、本プログラムの成果の学術的意義および社会的意義が確認される。

研究成果の概要(英文)： Under the research program, entitled “Research on the conception of body beyond the shortage approach”, we studied French phenomenologist’s (especially Maurice Merleau-Ponty and Marc Richir) approach to the “body” and its experiences at various levels (children’s experiences, psychopathological phenomena, etc.) in order to clarify its phenomenological character that is neither reduced to the pathological phenomena nor to the shortage approach.

For that purpose and method, we focused on the phenomenon of “narcissism” that either Merleau-Ponty and Richir discussed in their texts (Le visible et l’invisible, Recherches phénoménologiques, etc.). Finally, we demonstrated that this phenomenon, beyond the pathological phenomenon remained in the adult life, constitutes the basic structure of human “body” and behavior.

研究分野：哲学・倫理学・現象学

キーワード：身体 子ども 幼年期 現象学 メルロ＝ポンティ リシール 発達心理学 児童精神分析

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景を哲学・思想史の観点から説明したい。「身体」は哲学史においてきわめて否定的な役割を担ってきた。古代以来、身体は「魂」(不死)と「肉体」(欲望)との区別のなかで、あくまで後者に属するものであった。デカルト以降の近世哲学においても、身体は、心身二元論的な枠組みのなかで、心(非延長物)に対する物体(延長物)の域を出ることはなかった。こうした「身体」の位相を新たに検討したのが、現象学の創始者 E. フッサールである。彼は、人間の身体を「物体(Körper)」ではなく生命体(「生き生きとした身体(Leib)»)と考え(『イデー』第2巻)、そこから、この「身体」を媒介とした人間と世界および他者との関係を探求した(『デカルト的省察』)。

第二次世界大戦後、フッサールの現象学およびその身体理論はフランスに本格的に導入された。メルロ＝ポンティはフッサールの身体理論を受容する過程において、同時代のゲシュタルト病理学(K. ゴルトシュタイン、A. ゲルプ等々、cf. 『知覚の現象学』)と発達心理学(J. ピアジェ、H. ワロン等々、cf. 『ソルボンヌ講義』)の諸成果を参照することで、独自の「身体」概念を構築した。かたや、20世紀後半から今世紀初頭に活躍した現象学者のマルク・リシールは、ドイツ語圏の精神病理学(L. ビンスヴァンガー)と精神分析の領域(S. フロイト)で観察された症例を仔細に考察することで、現象学の身体理論に新たな方向性を提示した(「ファントム身体」、cf. *Phantasia, imagination, affectivité*, 2004)。

2. 研究の目的

以上に示した学術的背景が示すとおり、本研究は哲学という学問領域でこれまで重視されてこなかった概念(「身体」)および現象(疾病、発症、幼年期)を研究することで、健全な大人の生活に限定されない、より包括的な現象学的身体理論を構築することを目的としている。この目的は、下記の2点から具体化される。

(1) 欠如的アプローチを乗り越える身体理論の構築

メルロ＝ポンティとリシールは、子どもや患者の身体を論じる際に、成熟した健常者の身体をひとつの基準として設定することを方法的に退けている。なぜなら、こうした基準を設けることで、子どもや患者の身体は、つねに未熟ないし非健常としか記述されないからである。したがって、こうしたアプローチを、二人の哲学者は「欠如的(lacunaire)」(cf. 『知覚の現象学』、*Phantasia, imagination, affectivité*)な記述方法として批判する。そしてこの批判を通じて、両哲学者は、それぞれの観察対象をひとつの独立した現象として記述しようとする。その結果として、メルロ＝ポンティは幼年期に固有の「ナルシス的」な身体(cf. 『見えるものと見えないもの』)、リシールは精神病理的な状況に固有の「ファントム身体」(cf. *Phantasia...*)という身体概念を構築する。両者は、この種の身体概念が、幼年期や疾病時の一過性の現象ではなく、健全な大人の生活のさまざまな局面に介入することを指摘する。さらにそこから、思想史と科学史における従来の身体概念(健常、成熟、等々)に修正を迫る見解を提示する。

現象学の身体理論から子どもや患者を考察した研究はすでに存在する(D. Leder, *The absent body*, 1990; T. Welsh, *The Child as Natural Phenomenologist*, 2013, etc.)。しかし、先行研究の多くは子どもや患者の身体理論の構築を企図しつつも、最終的には、健全な大人の視点(子どもに対する大人、非健常者に対する健常者等々)をひとつの基準として設定してしまっている。これに対して、本研究は、両哲学者の身体理論におけるもっとも本質的な側面、すなわち欠如的アプローチの乗り越えから、現象学的な身体理論の再構築を第一の研究目的とする。

(2) 研究の学際的な裏付け

メルロ＝ポンティとリシールは膨大な量の発達心理学および精神病理学の文献を読み込むことで、独自の現象学的な身体理論を構築した。さらにそこから、両者とも、発達心理学や精神医学で前提とされてきた、健全な大人の身体概念を再検討し、子どもや患者も含む包括的な身体理論を提唱した(cf. 『知覚の現象学』、『見えるものと見えないもの』、*Phantasia...*)。この点において、本研究が彼らの身体理論を解明した後は、その成果は現象学における身体理論の更新のみならず、発達心理学、精神病理学、教育学など、他の学問領域との学際的な議論を可能にしてくれるはずである。こうした学際的な波及効果の可能性が本研究の第二の目的となる。

3. 研究の方法

(1) メルロ＝ポンティとリシールの経験科学へのアプローチの確認

最初に、メルロ＝ポンティの発達心理学に対するアプローチと、リシールによる精神病理学へのアプローチをそれぞれ検証する。前者の発達心理学へのアプローチに関しては、ピアジェの発達理論(『子どもの世界表象』、『子どもの自己中心性』)とワロンの鏡像理論(『子どもの性格の起源』)に対する彼の受容方法が主要な研究内容となる。後者の精神病理学へのアプローチに関

しては、スイスの精神科医 L. ピンスヴァンガーの統合失調症に関する分析 (cf. 『精神分裂病』) を、彼がどのように受容したのかを検証する。この検証作業を両者のテキストに沿って綿密に遂行することで、子どもおよび患者に固有の身体概念(「ナルシス的」な身体と「ファントム身体」) が的確に導出される。

(2) 導出された身体理論の検証

二人の現象学者が構築した身体理論(「ナルシス的」な身体と「ファントム身体」、上記(1)の成果)が、健全な大人の生活にどのような形で残存しているのかを検証する。さらに、その結果を、フッサール現象学における身体理論と対比し、検討する。これにより、(1)の成果の思想史における独自性と特殊性が明らかとなる。

(3) 学際的な裏付け作業

メルロ＝ポンティとリシールは子どもと患者の行動分析から独自の身体理論を導出しただけでなく、そこから、経験諸科学(発達心理学、精神病理学、等々)における従来の身体理論、その理論に立脚した対人関係論、さらには人間の社会における在り方に新たな視点を提供しようとする。したがって、彼らの構築した身体理論、さらにはそこから得られる示唆が経験諸科学にどのように貢献しうるのかを検証する。これにより(2)の研究成果は相対化され、本研究の学際的な水準が確保される。

4. 研究成果

本事業期間中の研究活動の内容、さらにはそこから得られた研究成果は下記のとおりである。

(1) 平成 31 年度

本事業の初年度である平成 31 年度は、資料の収集と精査を行うことで、上記「3. 研究の方法」の(1)に取り組んだ。メルロ＝ポンティに関しては、彼が参照した発達心理学関連の文献を網羅的に収集し、その内容を精査した。リシールに関しては、彼の対談本を翻訳することでその思想の全体像を把握し、この作業と並行して、必要な文献を収集し、その内容を精査した。年度の後半でその成果の一部を学会あるいは論文および図書で発表した。翌年度から新型コロナウイルスが猖獗を極める状況になった。したがって、この時点で、リシールに関するフランス語の共著書 (*Aux marges de la phénoménologie*) を公刊できたことは、上記「3. 研究の方法」の(2)の一部達成につながる成果となったため、本事業においては大きな前進であった。

(2) 令和 2 年度

本事業の 2 年目である令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症の猛威が顕在化した年度であった。海外への渡航が不可能となったため、リシールに関する研究は大幅に停滞した。こうした状況のため、前年度に収集・精査した資料をこれまでの研究の蓄積と合わせて、研究成果のアウトプットを重点的に行った(上記「3. 研究の方法」の(2))。その結果として、メルロ＝ポンティについては、これまでの研究の蓄積と前年度の成果を合わせて一冊の著書(『幼年期の現象学』)を公刊した。とりわけ、メルロ＝ポンティが提示する自己愛(ナルシシズム)の伏在した身体理論、そこで形成される対人関係の一般的な性質、さらにはその哲学的なインパクトが、著書では提示された。限られた資料によるアウトプットであったが、この著書の公刊は本事業の推進のためには、一つの重要な契機であった。

(3) 令和 3 年度

本事業は令和 3 年度が最終年度の予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、研究期間を延長せざるをえなくなった。また新型コロナウイルス感染症の影響に加えて、翌年度から本務校が変わることになる影響で研究のアウトプットがままならなかったが、上記「3. 研究の方法」の(2)として、リシールの人類学へのアプローチとそこで成立する間主観的コミュニケーションに関する研究(「現象学と人類学：マルク・リシールによる政治人類学へのアプローチについて」)を静岡哲学会で発表した。

(4) 令和 4 年度

令和 4 年度も新型コロナウイルス感染症の問題は収まらず、そこに富山大学から東北大学への本務校の移動の影響(研究室の構築作業)も加わり、研究の遂行に大幅な影響が生じた。そのため、研究期間を令和 5 年度まで延長せざるをえなかった。そのなかで、本事業における研究成果を、フランスで開催された国際シンポジウムで発表し(«Folie de la vision. La question du narcissisme dans la pensée phénoménologique de Maurice Merleau-Ponty») 各国から当地に集まった各分野の研究者からあるていどの評価を得られたことは、本事業にとって大きな進展であった。これにより、上記「3. 研究の方法」の(3)があるていど達成された。

(5) 令和 5 年度

本事業の最終年度である令和 5 年度は、研究成果を論文(「肉・私の肉・世界の肉 後期メ

ルロ＝ポンティにおける身体概念の再考察」)、共著書 (*Levinas et Merleau-Ponty : Le corps et le monde*)、翻訳 (『子どもの心理 - 』社会学 ソルボンヌ講義 2』) で公刊した。さらに、各学会 (フッセル・アーベント、日本サルトル学会、ハンナ・アーベント、東北現象学サークル、日仏哲学会、等々) でも成果を数多く (6 件) 発表した。これにより、上記「3. 研究の方法」の (3) が達成された。哲学および現象学の身体論において、「ナルシシズム (自己愛)」という概念が病理的な現象に限定されない一般性を備え、さらに欠如的な身体の記述を回避するうえで極めて重要となることが、最終的な成果として確認された。これにより、本事業は期間の延長はあったものの、当初の課題を遺漏なく遂行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 澤田 哲生	4. 巻 30
2. 論文標題 「肉・私の肉・世界の肉 後期メルロ＝ポンティにおける身体概念の再考察」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『モラリア』	6. 最初と最後の頁 137-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤田 哲生	4. 巻 38
2. 論文標題 「空想・神話・共同体 マルク・リシールとピエール・クラストル」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『文化と哲学』	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tetsuo Sawada	4. 巻 48
2. 論文標題 A la recherche du membre perdu: Merleau-Ponty face a la theorie sartrienne de l'"emotion"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Divinatio	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tetsuo Sawada	4. 巻 18
2. 論文標題 "Entre la vie et la mort": a propos de l'approche richirienne de la psychose	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Annales de phenomenologie	6. 最初と最後の頁 249-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 15件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「心的能力の動揺と触発 マルク・リシールによる『判断力批判』への現象学的アプローチから」
3. 学会等名 日仏哲学学会シンポジウム：「カントとフランス哲学 「自己触発」概念の現象学的展開とその諸相」（日仏哲学会、東京大学）（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「マルク・リシールの現象学：『対話』と各主著をめぐって」
3. 学会等名 シンポジウム：マルク・リシールの現象学（東北現象学サークル第1回研究大会）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「メルロ＝ポンティとアーレント：幼年期をめぐって」
3. 学会等名 第12回ハンナ・アーレント（東北アーレント研究会、東北大学情報学研究科）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松葉 祥一、澤田 哲生、酒井 麻依子
2. 発表標題 「メルロ＝ポンティと子どもの心理学を考える」
3. 学会等名 M. メルロ＝ポンティ『子どもの心理・社会学 ソルボンヌ講義2』（みすず書房）刊行記念 翻訳者トークイベント」（立命館大学間文化現象学研究センター・立命館大学人文科学研究科）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「空想・イメージ・情動性 ジャン＝ポール・サルトル『イマジネール』における現象学的なもの」
3. 学会等名 日本サルトル学会第51回研究例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「『幼年期の現象学』から肉の存在論の深化へ」
3. 学会等名 第46回フッセル・アーベント（東北大学文学研究科哲学倫理学研究室）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tetsuo Sawada
2. 発表標題 Folie de la vision : la question du narcissisme dans la pensee phenomenologique de Merleau-Ponty
3. 学会等名 LEVINAS ET MERLEAU-PONTY : LE CORPS ET LE MONDE（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 メルロ＝ポンティの絵画論と当事者の創作活動
3. 学会等名 塩飽海賊団（対人援助グループ）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Maiko Sakai, Tadashi Kawasaki, Tetsuo Sawada, Yasuyuki Sano, and Yu Miyahara
2. 発表標題 Phenomenology of Perception in Japan: Current Trends and the Future
3. 学会等名 PhP Around the World (https://vimeo.com/phparw)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 現象学と人類学：マルク・リシールによる政治人類学へのアプローチについて
3. 学会等名 静岡哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「メルロ＝ポンティ先生による子どもの絵の話」
3. 学会等名 塩飽海賊団（臨床心理士の主宰する対人援助グループ、公開セミナー）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「『幼年期の現象学 ソルボンヌメルロ＝ポンティ』を書いた本人に解説してもらおう」（1）
3. 学会等名 塩飽海賊団（対人援助グループ公開セミナー）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「『幼年期の現象学 ソルボンヌメルロ = ポンティ』を書いた本人に解説してもらおう」(2)
3. 学会等名 塩飽海賊団(対人援助グループ公開セミナー)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「『幼年期の現象学 ソルボンヌメルロ = ポンティ』を書いた本人に解説してもらおう」(3)
3. 学会等名 塩飽海賊団(対人援助グループ公開セミナー)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 「『幼年期の現象学 ソルボンヌメルロ = ポンティ』を書いた本人に解説してもらおう」(4)
3. 学会等名 塩飽海賊団(対人援助グループ公開セミナー)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩飽 耕規、三村 尚彦、澤田 哲生
2. 発表標題 「身体、空想、記憶をめぐる現象学者との対談」
3. 学会等名 塩飽海賊団(対人援助グループ公開セミナー)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田 哲生, 檜垣 立哉, 赤阪 辰太郎, 三宅 萌, 渋谷 亮
2. 発表標題 澤田哲生『幼年期の現象学』合評会
3. 学会等名 大阪大学人間科学研究科・共生人間学分野「哲学と人類学の新たな交錯」、共催：メルロ＝ポンティ哲学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 共犯性の現象学　メルロ＝ポンティにおけるナルシズムの位相について
3. 学会等名 第1回立命館現象学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田 哲生
2. 発表標題 調査報告：ソルボンヌ講義開講日時から見た中期メルロ＝ポンティ
3. 学会等名 第6回メルロ＝ポンティ哲学研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 Ed. C. PELLUCHON, Y. TONAKI	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Hermann (France)	5. 総ページ数 320
3. 書名 Levinas et Merleau-Ponty : Le corps et le monde (共著)	

1. 著者名 M・メルロ = ボンティ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 512
3. 書名 『子どもの心理-社会学 ソルボンヌ講義 2』(共訳、担当範囲:「子どもの意識の構造と葛藤」(pp. 1-94)、「幼児の対人関係」(pp. 166-280))	

1. 著者名 河出書房新社編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 268
3. 書名 『中井久夫 増補版 精神科医が遺したことばと作法』(pp. 244-246担当)	

1. 著者名 ハイデガー・フォーラム	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 640
3. 書名 『ハイデガー事典』(共著)	

1. 著者名 澤田 哲生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 330
3. 書名 『幼年期の現象学』(単著)	

1. 著者名 川口 茂雄、越門 勝彦、三宅 岳史、他数十名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 『現代フランス哲学入門』（共著）	

1. 著者名 マルク・リシール、サシャ・カールソン（共訳 澤田哲生、他訳）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 392
3. 書名 『マルク・リシール現象学入門 サシャ・カールソンとの対話から』	

1. 著者名 Ed. S.-J. Arien, J.-S. Hardy et J.-F. Perrier	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Hermann (Paris, France)	5. 総ページ数 292
3. 書名 Aux marges de la phenomenologie: Lectures de Marc Richir (共著)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>PhP Around the World https://vimeo.com/phparw PhP in Japan: Current Trends and the Future https://vimeo.com/545506675?ref=tw-share Marc-Richir-Archiv (MRA) https://itp-buw.de/marc-richir-archiv/ Annales de Phenomenologie https://Annales.eu/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------